



増毛と雨竜をつなぎたいと思いながら、実現できずに20年も経過してしまっただ。暑寒別岳から雨竜沼を経て南暑寒荘に至る単独縦走。毎年今年こそはとねらっていたお盆休みが又やって来た。8月12日から15日までの4日間が使える時間。天気予報から割り出した決行日は12日よりなく、他はすべて雨の予報。慌てて食料と軽い装備、カメラの用意をし11日は早めに就寝。

朝4時起床。登山口到着5時。ここ箸別コースの駐車場に車を乗り捨てる。下山予定の南暑寒荘とはまるっきり離れているので、車によるサポートが必要。夕方の5時に家内が到着地点に迎えに来ることになっている。その後出発の箸別口まで戻り、車を回収することにしてある。

木立の中はまだうす暗い。靴のひもを締め直し、登山者名簿に記入し、いつもの平坦な長いコースに向かって出発。空は曇り。

広い尾根の樹林帯の中を1時間ほど進んだ頃、右側後方の林からガサガサと音がする。「あれっ」と思いながら歩いていると、しばらくの間静かになる。熊よけの笛を持ってこなかったので、手を口に当てて、のどの声を断続させて出す「あわわわ〜」の発声を繰り返しながら足早に進む。忘れたころ又音がする。意地悪な熊さん。両側が切れていて一番細い尾根の標高600mも過ぎ、800m付近までは音は続いてしまった。

休憩中も落ち着かない。900m付近ではガスがたちこめ視界も不良。一服して、おにぎりを食べて様子を見ているうちに小雨になってきたので、今日は駄目とあきらめて、重い水を捨て戻る段取りをする。

「おやっ、急に晴れ間が広がってきたぞ。これは行けそうだ。大事な水を捨ててしまったが、まずかったかな」

幸い昨日降った雨が登山道にはまだ流れとなつて湧いており、一つのきれいな水たまりから、少しゴミの混じった飲み水を補給する。

増毛山地概念図



標高 1000m 付近の平坦になり始めた登山道の両側に、マシケオトギリソウやサンカヨウの高山植物が現れ始める。カメラに接写レンズをつけ息を殺して写し始める。来た方向をふり返るとガスが濃く、ごく近くの景色より見えない。頂上はもちろん見えないが、時折雲間に太陽の光がさしてくる。

いるいる！大勢の高山植物の花たちが！7 月頃が一番種類の豊富な時期なので、散ってしまったものもある。今は数は少ないが遅咲きで残っているものから、まだ盛りのウメバチソウ、萎え始めたヨツバシオガマやエゾシオガマ、散った後に、もう紅葉しているチシマフウロ、青紫色を揺らせて鮮やかに今を盛りに咲いているエゾノホソバトリカブト。もう嬉しくなって、誰もいない中、それこそ秘密の花園をひとり占めしたような気持ちで、あちこちと登山道に沿って写し回る。

今まで、この暑寒別岳には二十数回登っているが、こんなに時間をかけ気持ちを高揚させて花の観賞をしたことはなかった。あらためてこの小さな美しい生命達のたくましさを感じ、ガスに閉じ込められた空間の中で、一瞬精霊達と対峙しているような錯覚に入り込んでしまった。

やがてハイマツやミヤマハンノキが現れ始め、花も少なくなる 1396m の小ピークに到達。そしてガラガラの岩場の急傾斜が続く 9 合目を過ぎると、最後の胸突き八丁だ。頂上に続く雲間の広い大地を進むうち、ポンショカン沢から吹き上げる風がまたガスを運び、暑寒別岳の頂上は視界不良。先達チームがいて 6 人程が休憩中。指定席の社のかげで風を避けながら食事をとる。

二十歳過ぎの単独行の青年と話をする。麓にある山小屋暑寒荘から登山道を避け、そのままポンショカン沢を詰めてこの頂上へ着いたとの事。青色のヤッケを着て、浅黒い細面にスリムな体型。地形図にのせて計測するコンパスを手に持って話している。

「これからどこへ行くの？」

「群別岳から浜益方面へ抜ける予定です」
多分 3 日くらいの工程を野宿しながら踏破するのだろうが、熊の住家へ入っていくのだから怖くはないのだろうか？

それにしても荷物も少なく、たぶんテントはツエルトで、食事は乾燥式のインスタント食品で軽量化しているのだろう。サントリービールの歌ではないが、こんなところで久しぶりに、「すごい男がいるもんだ！」

イワギキョウ



エゾノホソバトリカブト

頂上を後にしてガレ場を少し下ると、緩斜面の平坦地となり、北西風から守られた東向きの斜面に、先程のお花畑では散っていた花が今まっ盛り。チシマフドウ、エゾノマルバシモツケ、トウゲブキなどの種類は少ないが時を謳歌。

この緩斜面はすぐに終わってハイマツの下り坂となり、次第に傾斜を増す。やがて急傾斜の草付きが現れ、雨でぬれた粘土の道はブレーキがかけられなければ、ルートを外れ恵岱別川源流へと落ちて行ってしまふ。

すぐにやせ尾根になり、ロープの張られたガレ場を進む。左右は切れ込んでいて、特に右の日本海側がひどく、覗くと崩壊性の黄色い砂岩の絶壁。ゾーッと足下が涼しくなる。

緩斜面になっている北側に回り込んだり、ガレ尾根の天頂に出たりして登山道は続くがやがて低灌木が茂って目隠しとなり高度を感じないルートになる。例の若者が目指す群別岳へ分岐する尾根の取付き点を通過する。尾根というほどははっきりしたものではなく、広い急斜面の感じで、もちろんここからは登山道はない。

この先に続く地形の状態を判断してポイントを決めることになる。少し先で私が休んでいると、あの若者はガスで景色の見えにくい中、地形図とコンパスでしばらく計測していたが、ザックにそれらをしまうとガサゴソという音を残して急斜面の笹やぶの中に姿を消してしまつた！

耳を澄ますと遠くで泣いている野鳥達のさえずりが、しきりと聞こえてくる。その中でも特徴のあるウグイスの「ホウホケッキョ」と、コマドリ of 美しい「ヒンタラララ」がとりわけ耳に心地よく響く。ガスはかかっているが暖かい心休まる昼下がりの暑寒別岳での一時。

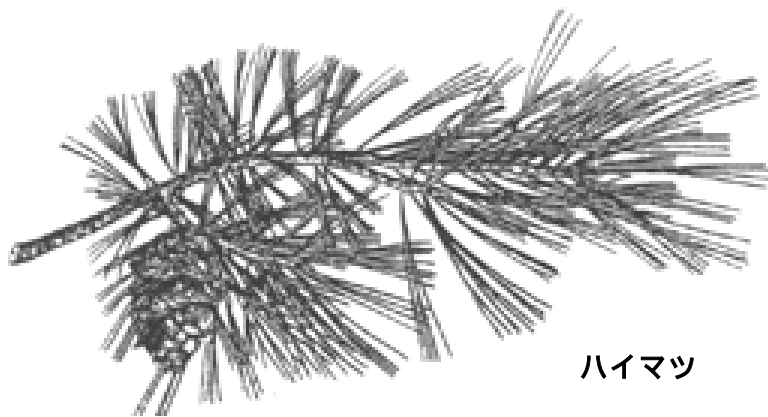
突然しじまをやぶる笛の音。尾根の下の方から危険を告げるホイッスル。あの若者が、身の丈を越える笹やぶの中で熊の気配を感じもがき鳴らす音。

「熊サンよ、俺はここのいるから、お互いの平和のために出会わないようにしましょうよ」という合図のサイン。多分無事に下山するだろう。気をつけて！

コースの途中に、北側の傾斜面に広がるお花畑。日当たりが悪く一番遅れた残雪が融けるのを待っていたように咲いた花々。遅れた時間を取り戻すように花真っ盛り。

ひょいと頭上を見ると、黒っぽいエゾリスが小枝に絡みついて実を食べている。人がいることなど気にしないで動き回っている。

暑寒別岳の頂上には、おなじみの黒と黄色のしま模様のシマリスも棲息している。彼等の冬は半冬眠と聞いているが、もう山では朝晩冬の気配が感じられ、厳しい越冬の支度が始まっているのだろう。来春も無事でいる事を願いそっと歩き始める。



ハイマツ

恵岱別川源流になる北側斜面の下方は湿原で、大小の沼が点在する。最大で 50m ほどの径の沼に、エゾヒツジクサ、オゼコウホネ、ミツガシワなどの花が咲く。

相対する南側斜面の下方は、徳富川の源流部となり、手つかずの自然が眼下に広がる。登り下りを繰り返していた尾根は下りのみになり、よく整備された道を降り切ると、左側の湿原に、草原からコンコンと湧き出る水飲み場が現れる。雨水溜まりで求めた水を捨て、腹の中にも水筒の中にもおいしい天然水を詰め込む。

なだらかな丘を越えて、いよいよ南暑寒岳への急な登りとなる。何度か休み、高度を稼ぎながらやっと頂上へ。

かつて4月の春山登山で雪の暑寒岳に立ち、この山を駆け上がるスノーモービルを見た時は、こんなに急勾配とは思ってもみなかった。今来た彼方にある暑寒別岳をふり返るが、依然としてガスが南から北方向へ走り、見たいと思う高い峰々は姿を見せてはくれない。

ここに30分ほど立ちつくす。今歩いてきた尾根を分水嶺に、右は恵岱別川、左は徳富川の雄大な源流域の地形を、ほんの少し頭をめぐらすだけで一望できるパノラマを堪能する。そろそろ出発しないと約束の5時に間に合わなくなる。景色を惜しみながら、南暑寒岳より雨竜沼へのゆるい下りにかかる。

車の通れるような広い登山道は足早で、チョットした急な下りはトントントンと勢いをつけて急ピッチで歩き、どうにか雨竜沼の板作りの散策道まで来る。すれ違う時は狭い板歩道の上で体を横にしてやり過ごし、「今日は」の義理の挨拶を交わ

しているうちに、疲れた足に硬い板の追い討ちが加わり、急に歩きのピッチが落ちる。

湿原の終わりから急な沢になって落ちるペンペタン川沿いの岩の多い登山道がまた難所。右足を踏み出して、左の足が着地の瞬間の衝撃に承えられず、足を滑らしたり、次の踏み出しへの動作が遅れたりする。ひざのクッションが疲労で役立たずになっているため、しょうがないゆっくり降りるさ。普段なら他の人を追い越す神風下りの場所だったのだが。

最後の橋を渡り、階段を上がり切ると砂利道のハイウェイ。登山靴ではすべて歩きにくく、テレンコン、テレンコンと足を引きずりながら歩いているうちキャンプ場へ到着。とたんに疲れの様子を隠し、顔ははつらつ、足は地面から上げて普通に歩く。南暑寒荘到着は約束の5時きっかり。

「下着の着替えを持ってきてくれたかい」

「あっ忘れた」

スッポンポンになって、たったひとつの着替えだったズボンをはき、上半身は車の中にあったタオルを巻きつけ運転開始。道道雨竜停線から国道275号に抜け、また道道増毛稲田線に入り、日本海岸線の国道231号に抜ける。箸別から今朝入山した林道に入り避難小屋に着いたのは、黄昏迫る午後7時ころ。登山者名簿に下山を書き込み、2台の車に分乗して林道を下る。日はとつぷりと暮れ、道で休んでる山鳥がライトの光に慌ただしく飛び上がる。泣きそうな空になりかけていたが、ついに大粒の雨が落ち始める。この雨は止まず、お盆の間は天候が悪く、登山できた日は、この12日よりなかった。

平成7年8月12日 無事縦走に感謝！

